

文學博士関根正直先生著

都下てふり考證

附梅が枝物語

東京 大倉書店發行



此の梅が枝物語は、原書の末に、

相模の國よりかへさに、神奈川といへる驛路ウマヤヂにとまりたるに、物語らふべき人しなれば、つれづれと燈火トモシヒかゝげをるもさうづしうて、「讀む可き書フミあらば貸し與へてよ」と請ひたるに、「かゝる物侍り」とてもて來ぬ。

「こは耳なれにたれば、讀むべうも覺ぬねば、さてうちれきつ。されど、うちも寐られねば、筆デどう出て、かのうたひものゝさまを、物語文フミのやうに書きやり見たるなり。唯故郷フルサトに待ちつけ居たらむ女子へのつとにもせまく、且は旅路のこゝろやりにもとて、ちびたる筆して書いつけたるになむ。

六 樹 園

とある通り、旅亭に於て、一夜に「ひら假名盛衰記」といふ淨瑠璃本の、梅が枝無間の鐘の段を、古體の物語文に翻譯したのである。此の淨瑠璃は、操(人形)

芝居のために出來た義太夫節の淨瑠璃で、竹田出雲、文耕堂、三好松洛等數人の合作であるが、元は歌舞妓芝居の方から出たのだといつて、歌舞妓年代記卷の二に、かういふ事が出てゐる。

享保十六年春、中村座「けいせい福引名護屋」云々（瀬川）菊之壺傾城かつらぎにて、無間の鐘の狂言始めて勤むる。誠に古今の大當りなり。○無間の鐘の事、遠江國佐屋郡西山村に、無間山觀音寺の釣鐘を撞けば、未來は無間地獄にれつると雖も、此世にては富貴の身となるといへる事を、狂言に取組み、元祿二己年大坂荒木與次兵衛座にて、「傾城小夜の中山」といふ名題に、谷島主水といふ若女形、傾城うばらにて鐘をつく所作、始めなり。其後元祖芳澤あやめ、京都早雲座にて鐘をつく。其時の所作は、水木辰之助すなはち元祿十四年の事なり。又享保十三年春、京、市山助五郎座にて、

瀬川菊之丞、庄屋六右衛門娘れますにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘にながらへて打ちしが、始なりといふ。同十六年亥春、中村座にて、かつらぎにて勤むる。初日舞臺にて、金をつゝむ物なき故、衣裳の袖を誠に引切りたりし、其思入よかりしゆゑ、翌日より其通りにせしとかや。其後大坂竹本筑後掾座にて、元文四年末四月十一日「ひら假名盛衰記」といふ新淨瑠璃初日なり。是れ「福引名護屋」の菊之丞の無間の鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも、袖引きちぎり三百兩、つゝむに餘る喜び涙、とある事、瀬川家の藝、代々のほまれなり。

無間の鐘の傳説は、人口に膾炙してゐる上、演劇の方に、かういふ來歴もあり、又操劇アマツリの盛衰記をも、歌舞妓役者の方で度々演じて、童謡にまで成つてゐる位だから、當時は誰れも知つた事で、翁も「耳なれにたればといつて、わざと之

を例の和文に譯ウツしたのであらう。今日てば無間の鐘なぞいふ舊劇は、流行せぬから、淨瑠璃の本文を出して註脚に代へた。讀み比べて御覽じろ。しかし物語の方は體が體だから、文が自然長くなり、詞も耳遠くて、今の人には、淨瑠璃文の方が簡明で分りよからう。翁の手腕でも、時勢には勝たれぬ。今日和文の行はれぬも、致し方がない。

梅が枝物語

あそび
和名抄遊
女楊氏漢
語抄云和
行女兒禮
名又加禮
女字云阿
曾比

れしてゐる浪花のわたりは、四方ヨモの國々の船
つどふ所にて、あろび遊女どか名のりする者い
ど多かる中に、神崎の里なる千歳チトセの何某が
宿なむ、わきて賑はしく、晝よるをい
す酔ひ亂れて、うち寮あげ遊ぶ人絶絶えざりけ
る。今宵とりわきてやごとなき人わたらせ
給ふとて、家あるじうるはしう袴着よろひ、
ま客らう室ど内の外うちと掃き拭はす。女ばらは
あかね赤の布腰にひきゆひて、立ち走るさま、

平假名
盛衰記
梅が枝無間の段

爰も名高き難波津に、戀の船フネつき
數々の、多かる中に取り分けて、
酒くみ交す神崎の、里の色宿イロヤド千年
やは、客に絶絶え間もなかりける。
殊に今宵は晴はれの御客と、書院座敷
のはき掃除、亭主が袴、中居が揃
への紅も、園生に植ゑて隠れなき、
大名客ダイメイキヤクの御入と、表の方賑はしく、
人目を忍ぶ旅乗物、れ供まはりも

いとくす浮カレいろぎたるけはひともなり。ま

ことや紅クレナ井の花ころ園生に植うともかくろ

へざる色なれ。深うやつし給へれど、誰れ

かは常ざまの人としも見奉らむ。どのかた

に人あまた聲して、輿ながら昇き入る。「晝

より待ちつけ參らせし」道なごつゐろうして、

中門の戸押しあけ、奥まりたる方のねまし

に入れ奉る。「梅が枝の君にどく告げてん。

まづ菓物參らせよ。大御酒御肴とく」など

聲高うのゝしる。地火爐チホロの湯たぎらす音な

ど、さながら松ふく風にかよひて、心ゆけ

地火爐拾遺
宇治記後
小右記續
三年談な
古事見ゆ

かるくとど、追從輕薄切聲キリコエの、切
戸口より直スグに昇き込む奥座敷、梅
が枝様へ人走らせ、うれれ菓子、
たばこ盆、釜をたぎらす音羽山、
馳走ぶりとぞ見ゆにける。

る設けのさまなり。

庭にはきさ二月さらぎの梅の風まち顔なるが、さ

と吹く度毎に、雪みぐれの色にまがへるな

どは、はむある夕暮の木のもとなり。梅が枝

の君といへるは、しよ所司しの別當の北の方に

宮仕せし女房にてありけるが、心づからの

忍びわざより彼處カシコを逐ひやらはれて、かう

爰にさ流すらへて、遊女アッピギに身をかへてけるな

り。げに此のひと一樹もどの薰りいみじう、同

じつらなるも皆けれされて、ねたき事に思

へる深山木も多かりけり。偽りのなき世な

みやま木
源氏紅葉
賀の巻に
花のわた
はらのミ
やま木な
り
古今戀四

雪やみぐれや花ちる嵐、かはい男

に偽りなくは、本の心であはぢ島、

千鳥も今は此の里へ、身をば賣ら

れてやり梅の、名も梅が枝の突き

出しには、名木ならぶ方もなく、

千年がもとに入り來たる。亭主立

ち出で、「れろい」梅が枝様、け

ふのれ客は東國のさるれ大名、初

對面から身請ミウケの相談、箱入の駿河

小判、すつしりとしたれさばき、

いっせいのなせがば
なりのこが
いかにせが
り人のこ
まのほう
れしから
まし

りせばなご、うち誦じ入り來るさま、こよ
なう愛敬づきたり。あるじ「いかなるにか、
遅くわたり給ひし。今宵のまらうとぞねこ
ろ、東國にてやごとなき國の守にはあなれ。
けふの見參すぐして、やがて迎へどり給は
むとて、れもとのたけばかりに、黄金コカネつみ
並べて、とくより待たせ給へり。はやわた
り給ひねかし。」とはやりかにいふもにく
し。「東國どのたまふ、其のまらうとの面持オモモチ、
もしははオチたちばかりにて、ふくよ肥かに鬚が
ちに、色黒き人にはねはせずや」と問へば、

サア〜奥へ」と云ひければ、「東
國どれしやんす、其の客の年ばら、
廿ばかりでてつくりと、色の黒い
髭男かへ。」「けもないこと、〜」
「うれで心が落ちついた。わたしも
爰に待ちあはせ、逢はねばならぬ
人がある。」「れつと合點、ろこは
我れらが請け込み、禿衆で座敷を
くろめん。ね前の御用は彼のふか
まの源太様に、「あひの襖ね引き立
ててころ入りにけれ。」「しやほんに

催馬樂
いで我駒
はやくゆ
きませま

「いな、さる様の人にはねはせず」といらふ。
「さらばあが心も落ちぬ。されど暫しこゝ
にありて、物語らふべき人あなれば、さる心
したまへ」といふに、「其の事よく知りて侍
り。何某うけひき侍れば、彼處はわらはに
譲りて物せん。まちつけ給へらむ人ころ、
忍び男と名高かる源太の君にはねはすら
め」など云ひつゝ、さう障子押しあけて入り
ぬ。「あなかたは。心も知らぬ人の仲だち顔
よ。さばれ、ぬしはいかに賺し給ひし。た
ろがれにわらたせ給ひねど、鹿島の里まで

何じやの、此の梅が枝が心もしら
ず、身請くと取持ちがほいやら
しい。ろれはさうと源太様、暮方
から御越なされど、香島まで文や
つたに、なせ遅い事じやまで、早
う逢いたや。顔見たや。逢はゞど
うして、かうしてど、たばこ引き
よせ、胸の思ひは日に千度。チタヒ

つち山ま
つらむ人
を行きて
早見ん

六帖
かれぬ身
なもゆこ
きくさも
いかせ
そんちこ
み水ならぬ
み水ならぬ

清息
せうろこしつるに、待乳山とも思ひやらせ

給はずや。見奉らばとやせまし。かくやせ

まし。』など思ひ亂れつゝ、煙り草どうでて

くゆらすさま「水ならぬ身は」どもいはまほ

しげなり。

男は夜離よがれせずかゝづらふに、今宵も例の

ごと如、うち忍びて來たり。装束より始めて、

よろづきよらをぞ盡せる。はをり頭巾など

いへるものは、なほくしきものから今め

きなつかしきは人柄なるべし。君はいとく屈

したるけはひして、疊算タミサンとかいふ事すなる

夜ヨゴト毎々々に通ひ來る、梶原源太景

季、心をつくせし身のまはり、大

盡小袖長羽織、ほうろく頭巾紫の、

色にひかるゝ揚屋町、千年が奥を

窺へば、れれを待つのか疊算チヤウ、丁

度ト能い首尾幸ひと、ずつと通れば

六帖いつさてて
わが戀かひひ
ざらむ信さむ信
濃なる淺な淺
間の山ま山
煙たつたつ
も

万葉七
こましゆ
くにひさ
きもりの
あさ衣肩
のまよび
は誰れ見
さり見ん
和名抄
布（万與
）縮欲

を、我れを待つにころと、先づ心れごりせ
られて入り來れば、女「淺間の山は煙り立
つとも」と口ずさみつゝ、ほかげほかげにうちろ
むけるを、「あなむづかし、かう來たんなる
を、何トテなでふ心ゆかぬにか、くねくねしうも
てなし給ふよ。こよひのまらうどの后がね
に定り給へるところ聞きしか。さばれ、こ
よなう思ひあがり給へるよ。麻衣の肩のま
よひは、とり見んともればさじかし。」とささ
がなげ氣にいひて、歸らむとするを、せめて
及びて、「けふの席まじに物することは、固より

梅が枝は、火燧コタツにとんと身をろむ
け、煙くらべん淺間山と、ろらさ
ぬ顔でふくきせる。「是れ歌どころ
じやない、來たわいの。何か機嫌
に入らぬやら、めつきりと、もたせ
ぶり、大名客の襟につき、御勿體で
ゑすか。我れらが様な浪人、黴カビた
襟には付かれまい。」とすんど立つ
を、「待たしやんせ。座敷ばかりを
勤むる筈で、けふ爰へ呼ばれたは、
文で知らせて合點じやないかへ。

壞也
貫之集
さくらち
り卯花も
まだ咲ぬ
れど心さ
しには春
夏もなし

せうろこして聞ひ參らせつ。知らぬ顔なる
はいかにぞや。今はたゞ春夏もなき志を、
かゝる身の慰めにはし侍るを、世の人の好
きたわめたらむやうに、あだくしき筋に
いひなし給ふは、中々淺き方になむ。いか
に思ひたがへて、かうひがくしきことを
も述べやらせ給ふ。契りうめし比ほひより、
こぞ去年ことしと數ふれば、憂きを忍べる年ご
ろのう懨れたさなき、ねばろげの事には侍ら
ず。聞ひ參らせんことも豆多こゝら侍り。先づ
なだらかに休らひ給ひてよ」と、涙を一目ヒトメう

色も戀もうちこして、心底づくの
二人が中、口舌どころじやん御座
んすまい。ね前と一たいかう成つ
たは、並大抵の事かいな。わしも
云ふ事たんどある、遅う來ながら
其のいぶかり、にくい男」と目に
もろき、涙を戀のならばしなる。

けてゑん想じたる様、あい愛敬ぎやう深し。さ
るはくだくしき事多かれと書かず。

男も心折れて、「な歎い給ひろ。元よりの志
は、疑ふべきにあらず。まづ告げ參らすべ
き事あり。鎌倉殿の御弟君、院の仰せごと
蒙らせ給ひて、うて計手の使に一の谷に軍立イクサマヂし
給はんとす。わが父はらからも御供に候ふ
べきにて、我れも共に供奉し參らすべき事、
かねて思ひ設けし事なれば、こゝらのつは兵
ものゝ中に這ひまぎれて、思ひ出せんこと、
かゝる時過ぐすべがらず。さるは今夜寅コヨヒの

「もうよい泣きやんな。疑ひ晴れ
た。扱うなたに云ふ事あり。今夜七
つの出汐に、父を始め弟の平次景
高、一の谷へ出陣、某も能き時節、
軍勢にまぎれ下るにつけ、うなた
に預けた産衣ウツギヌの鎧、うけ取りに來
たわいの。」と聞くにはつと當惑
の、色目見てとる景季、「いやく
氣づかひしやるな。長う別れる事

時オキと掟オキてられつれば、ろくに預け置きつる産衣ウデギの鎧ヨロイとくたべ賜。」といふ。女うち聞くよりとみにいらへもせで、うつぶしたれば、「さはわびしとや思ひたまふ。されど久しうとだぬすべうもあらず。我がいとさなき時、鎌倉どのより、かしこき御名の文字をさへ分ち給ひつれば、猶かくてもればぬひとかたならず、ろれをほこらひをりて、父君の助事かうじをさへ物どもせずなど、かしこに聞こしめされん事を始め、人々の思ひいはん事もかたはらいたくなむ。こたび平家のつ

でもなし。是非今度は行かねばならず、れこどもかねて知る通り、もと某は頼朝卿の烏帽子エボシ子シゴ、ろれをかうに勘當のわびせぬかと、父の思はく世の人口、今度平家と戦はゞ、分捕高名譽れをあらはし、今の難儀を昔がたり、悦んでたも梅が枝」と、何心なく語るにぞ、思ひ設けし事ながら、俄にはつと胸いたみ、「其の鎧の事きくと心の苦しみ、」して其の鎧が何とした。」

葉集三も
のふ治
やそ宇
川のあ
る木に
さよふ
のゆく
しらす

男はたゞあきれて、「ろはゆゑ由ヨシころあら
め。いかにやいかに。」とせむれば、「しか世然
なれ給はぬころ、所せう生オ立ち給へるや
ど貴なき人のならひなれ。かう助事じかう蒙ふら
せ給ひてより、かくてれはする事のせんす
べなく、せめてはふれ奉らじの爲に、此の
神崎の君に身をかへ、とざまかう後ざまうし
ろみ奉りぬれど、かくある初めより、君を
ま客らうどのさまに扱ひて侍れば、さる設け
に、こ多いらの金こがね、費多つづのへるも、
何イカばかりとか覺す。たどひ世に時めき、勢

ひ、まして勤めの身なれば、金の
生る木はあるまいし、はゑる土は
持つまいし、れ主スシの勘當ゆりる迄
ど、いつもの揚屋に呑みてませ、
積りくし揚代金、三百兩の金の
代りに、其の鎧はやつたわいな。」
「扱は其の金がなければ、鎧は源太
が手に入らぬか。ハアはつ」とば
かりに當惑し、しばし詞もなかり
しが、「もと此の鎧は頼朝卿に拜
領、家にも身にも代へざるを、し

万葉集十
八すべらぎ
のみよ榮
えむさま
づまなる
みちのく
やまにこ
がね花咲
く
同九
妹がため
我玉ひる
ふ沖べな
る白玉お
てこ沖つ
白波

ひある人の子なりども、たからといふ物は
盡くる限りあり。まいてれるかなる女の身
にて、こがね花咲く山はらうせず。沖べな
る白玉、いかで拾ひ得む。御かうじだにゆ
りなばと思ひはかりて、何某のあるじに語
らひて、三百兩のこがねのしろに、かの御
鎧をなむをぎのり置きつる」といふ。「さら
ば其のこがねなくば、産衣は贖ひ難しや。
こはいかにせまし。」と胸つぶれて、しばし
物もいはれざりしが、やゝためらひて、「ろ
も此の鎧は、鎌倉殿の賜物にて、よろづの

なしたり残念や。今は悔いてかへ
らす」と、胸押しひろげ刀を取れ
ば、梅が枝あわて押しとゞめ、「こ
りやまあどうろたへてじや、死
ないでも大事ない。」「いや〜今
夜の出陣をばづれ、一生埋れ木と
なり、のたれ死せんより、只今切
腹、ろこ放せ。」「サア〜其の鎧
さへ手に入れば、れ前の望みは叶
ふでないか。して其の金は、」どう
して調へると、御不審もたゝう、

寶タカラにくらぶべきにあらず。家にも命にもかへ難きものなるを、くちをしうも失ひつるよ。ろよや今は悔ゆともかひなし」とて、むね押しひろげ、刀とりて死なむとするを、どくだきどいめて、「こはな正氣。うつし心もなうれはするかな。」とわななく。「いな、こたびのいくさにれくれなば、生けるかひなし。埋れ木と朽ちはてんより、心清く死なんころまさらめ」と、しほ涙垂たれつゝいふ。「彼の御鎧あがなひ得て奉りてん。な歎き給ひろ。女の身にいかにすらむと、いぶかり

ろこがれ前と談合づく、奥の客に身を任せ、たらしなば、二百兩や三百兩の金は自由、「扱はれれ故身をけがすか。」「夫の難儀にや代へられぬ。」「不便の者の心やな。假タト令死んでも忘れぬ。」と涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、たまへが爰にござつては、客をたらずに心が置かれる。」「ヲ、尤々、後にこうぐや。首尾能う、じやが、氣をもんで持病の瘡ツカヘ、借錢のかはりに、瘡

給ひなむ。こは御心にだに免させ給はゞ、
こよひのまらうどに添ひふしして、さまよ
く拵へなしなば、さばかりの金こがね、易く
得侍らむ。さはいへど、年比誓ひし操、い
たづらになりなん事、かへすがへすくちを
しくころ。」とて、かきくどき泣く。「あはれ
の人の心や。我が命たゆども、さる志忘る
べきかは。」とても又泣きぬ。「ゆめ努さること
なのたまひろ。彼のまらうどをこしらへん
には、君のかくてねはしまさば、心の鬼に
思ひたがふる事もや。とく歸らせ給ひね。」

ねこしてたもんな。」と別れてころ
は歸りけれ。あと見送つて梅が枝
は、暫し涙にくれけるが、

とすゝむれば、「さかしサウヂヤ。長ゐせん、なか〜
 にすさまじからむ。暫し過ぐしてまゐ参こむ。
 よく拵へ給ひてよ。必ずむねを痛め給ひて、
 れ負ひめもつぐのはず、や病まうをさへ引き出
 だし給ふな。」などいふ〜かへり見がちに
 出でてゆくうしろで、見送るさへ例ならぬ
 袖の露けさなり。

「必ず心いられして、いたうな惱み給ひろ。
 まことは、たばかりごととしてなど聞ぬしは、
 あ晋がいつはりになむ。あ朝臣ろのいたづらに身
 をなし給はむ事のかなしく、しばしのどめ

「必ず氣づかひなさるゝなエ、わ
 たしが心當りのあるといたは、
 みんなうろ。れ前の命が、助けた
 いばつかりじやわいな。何のよし

んまでのろらぶとにぢあなる。元よりゆか^録
りなきまらうと、いかで疎^{ウツ}かる人に、さる事
やはすべき。さばれ、こよひの程にきせ^鑑なが
も得がたく、君の望みもかなはずは、死に
給はんこところくちをしけれ。あはれいか
にせまし」と、とぎまかうぎまに思ひめぐ
らして、はし近うながめ入りてをるに、一
間なる方に聲よくうたふをきけば、糸によ
る調^{ニアハシク}べも、つきなからず。

とをあまり 六つてふ年に
たまづさを 手にとりすゑて

みもない奥の客が、三百兩の金く
れうぢ。今宵中に調へねば、鎧も
戻らず、源太様の望みも叶はず、
金ならたつた三百兩、ア、金がほし
いな。」

二八十六で文付けられて、二九
の十八でつひろの心、四五の廿^{ニシラ}
なら一期に一度、わしや帯とか
ぬ。

「ア、なんじやの、人の心も知らず、
面白さうに唱ひくさる。あの歌を

とをあまり

八つてふ年に

ろのひとに

かへさへ申し

はたとせと

年をしふれど

したひもゝ

猶どきやらす

戀ひつゝをる

と謠ふめり。「こはなど、思ひ亂るゝ人の心をも知らで、思ふさまにも謠ひなすかな。

彼の唱歌にいへらむやうに、あろ朝臣に馴れ參

らせ、御館ミタテをし退ぎきて後、かう遊びとさへ

は流落ふれにたれど、さすがこと人には下紐解

かず。一日なりども、睦ましきめをとどな

聞くにつけても、源太様になれろ

め、館ヤカタを立ち退ノき、君傾城に成り

さがつても、一度客に帯どかず、

一日なりと夫婦にならうと、思ひ

思はれた女房をふり捨て、今度の

軍に譽れを取り、勘當が免された

いと思し召す、男の心はぶんな物

じや。何かに付けて女子はど、思ひ

切りのない物はない。男ゆゑなら

勤めするもいとはねど、まだどの

様な悲しい目を見ようも知れぬ、

りて、世にあらましなど、さる方にのみうちたのみしを、ねぼしもかけず、こたびの軍に譽れ得て、かうじゆりなんとのみ、思ほしかけつる、あはれこよなき誰すらをだましひぞかし。どにかくに女といふものころ、思ふくさはひ絶種ぬざるものなれ。あが君のためかゝる筋にたゆたふなど、いとふべうもあらねど、ありくしてなほ末の世に、いかならむ悲しかるめをや見まし。うれも彼れも皆宿世すぐせなめり。とまれかくまれ金こがねころほしけれ」と、歎かれて立てる

ろれも金ゆゑ、何をいふても三百兩の、金がほしい。

わしや帶とかぬニツツ甘なら、四五の甘なら一期に一度、わしや帶とかぬ、かへらね昔戀ひしのぶ。

に、彼處には又今めかしき聲して、れッノサキテうよ
りて花やぎうたふ。

あがどしは はたちになりぬ

然はあれど 命のかぎり

わがせこが ゆひてし紐を

どかめやは わかれし人は

ゆくみづの 返らぬむかし

戀ひやしのばむ

うちうへぬる聲もいとけ掲ち懸えんなり。

女思ひうんじて、忍びよりてまらうどを殺
し、ふどころなる物盗みてんや、とさへ思

「ほんにうれよ。あの客殺して身
請の金盗まう。イヤくくく、も

ひ起しつれど、さるひがわざし出づとも、
中々いたづらになりなば、なき親の仇も討
たれじ。さもあれいかにせまし、此の日の本
の國の佛も神も、かくにはかなるねぎ事は
うけひき給はじよ。いでや夫戀ふ女の石と
なれるためしも有る。身の賤しきはさる
事ながら、こゝろ来きては誰れにかは劣ら
む。身はいはほどもなさばなしてむ」とて、
つい立ちて、すのこなる石の鉢に、たゞへ
し水をむすびて、手あらひ口ろゝぎて、人
や知らむとうちひろみて、あなたなる方に

し仕損じ殺されては、とゝさんの
敵も討たれず。ア、どうしやうな。
もはや日本國に梅が枝が、祈る神
も佛もないか。ハア、オ、ろ
れよ、夫ゆゑには石と成つたる女
もある。我れは賤しき流れの身な
れど、一念は誰れに劣らむ、岩ほ
どなれる手水鉢、水むすび上げ口
すゝぎ、伏拜みく、人に知らせ
じ聞かせじと、ひしやくれつ取り

向ひて、しばしをがみ入りて、ひさく取り
 上げたるさま、何事すらむ、ことさらびた
 り。

「かねて世の人の云ひ傳ふる、無間の鐘をつ
 く時は、とみ心のまゝなりと聞く。ろは遠
 つあふみなるさやの中山といへる所の御寺
 にありどか。道は遙かに隔たりぬれど、わ
 が斯く一筋に思ひ入りたる心もて、此の鉢
 を彼の鐘になすらへ、つきてしるしを見す
 べきなり。さもあらばあれ。これを無間の
 鐘となし、思ふ事かなはゞ、生ける限りは

「傳へ聞く無間の鐘をつけば、有
 徳自在心のまゝ、是れよりさよの
 中山へ、遙の道は隔たれど、思ひ
 つめたる我が念力、此の手水鉢を
 鐘となすらへ、石にもせよかねに
 もせよ。心さす所は無間の鐘、こ
 の世は蛭にせめられ、未來永々、
 無間墮獄の業をうく共、だんない

蛭ヒルといふ蟲にせめられ、來む世は無間ムケンに墮
獄すとも厭はじ。海川にすたれしこがね白
銀、たゞこゝもどにかい寄せ給へ。なも觀
音ぼさちと、ひたひに手押しすり念じをり。
かほ色も赤らかに、紅梅のにはひ添ひ、髪も
ふどり空ざまにたてる心ちせられて、ひさ
く持てる手さへわなしくふるふを、思ひね
んじて、「いで打たむ」と振り上ぐるほど、
誰れにかあらむ、たか標どのさう障子じ一ひと間ま
ばかりれしあけて、「こゝにころ」と云ひざ
ま、こゝらのこがね投げ出だすものか。は

く、大事ない。海川にすたれる
金、一つ所へ寄せたまへ。無間の
鐘。」と觀念す。面色忽ち紅梅の、
花はちりぐ心も髪も、逆立ちあ
がり、ひしやく持つ手も身もふる
はれ、既に打たんと振り上ぐる、
二階の障子の内よりも、其の金爰
にと三百兩、ばらりぐと投げ出
だす。深山ねろしに山吹の、花ふ
き散らす如ぐにて、爰に三兩かし
こに五兩、是れは夢かうつゝかや。

げしき深山ねろしに、山吹の花こき散らす
 ごと散りばひれつ。こは夢にや、さはうつ
 つにころ。ろもいづこの御佛にか、知らせ
 給はぬ人の、かく餘るばかりうつくしみ給
 へる、來ん世の末も忘れ侍らじと、ろゝろ
 心もうせて、且は恐ろしきこゝちすれど、
 こゝ彼處搜り索めて、三ひら五ひら拾ひ集
 む、嬉しさいふべうもあらず。包みもつべ
 き物もあらねば、袖ひきやりてつゝむにも、
 猶あま^りあ^る喜^び涙^は、ともにつきせず。
 とく御鎧あがなひてんと、ひた^顔ひにさしげ

どなたか知らぬが、此の御恩、死
 んでも忘れぬ〜と、嬉しいやら
 こわいやら、拾ひ集むる心もろづ
 ろ、袖ひきちぎり三百兩、つゝむ
 に餘る悦び涙、鎧がはりの此の金
 ど、押しいたゞきれし戴き、いさ
 みいさんで走り行く。

て、
いろいろさう^顯どさつ、
走り行きけりど
ぎ。



おくがき

都のてぶりの辭句の出據を考へて、原書の鼈頭に朱筆を入れて見たのは、去る三十三年の歳暮休みの折からであつた。然るに忽ち一月に入り、公私の用務の忙かしくなつたについて、稿本は其のまゝ本箱の底に入れ置いたところ、今年の夏ごろ、帝國文學の材料を何がな送れど、達つての頼みに餘儀なく、此の舊稿の片端を、同誌の紙面ふさげに載せた所が、同じ事なら全篇まどめて、單行本にせよと、勧める人が多いので、つひ其の氣になつて上版する事にした。

私は數年前から、中古の草子日記類や三鏡軍記などの、註釋の少ないものを始め、近世にもわたつて、近松等の院本や、也有の俳文、餘齊綾足の系の小説文などにも、考證めいた註を加へて見たいと、身にねはぬ野心を起し、ポツ／＼と

爲かけて見たものゝ、近年段々にろれらの中で、詳解評釋などといふ書も出来たから、今は自分の仕事は中止したが、此の書も實は其の中の一つである。粗糲至極な舊稿を、今更世上に出すも恥ぢ入る次第だが、かうして置いたら、古人の骨折も後に傳はり、又初心の人には幾らか参考にもならうと思つてである。

明治四十二年十一月

三樹園主人

明治四十二年十二月廿五日印刷

明治四十四年一月八日發行

◀ 著 作 權 所 有 ▶

著 者

關 根 正 直

(都のてぶり奥付)

發行者兼
印刷者

大 倉 保 五 郎

印刷所



大 倉 印 刷 工 場

東京市日本橋區通一丁目十九番地

發 行 所

大 倉 書

電話本局四一四番地
振替口座東京二三八番

